Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 朝鮮語テキストの言語呼称小攷 : 歴史と変化のはざまの風景 |
| Author(s) | 植田, 晃次 |
| Citation | 言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 44-55 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/88401 |
| rights | |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

研究ノート

# 朝鮮語テキストの言語呼称小攷
## ― 歴史と変化のはざまの風景 ―[1]

植田晃次

## 1. はじめに

外国語テキスト(以下「テキスト」と略)は、執筆者が学習者に教えよう／伝えようとするその言語そのものとそれにまつわる事柄が盛り込まれて編纂され、そこには無意識下のものを含め執筆・出版関係者の意識が反映されているといえるだろう[2]。これを検討することは、高等教育の外国語教育が目的の１つとして何を目指すのか、学習者の目標言語観や当該言語文化圏観の形成にどのような影響を与えるのかという問いに対する示唆を与えるであろう[3]。複数の呼称を持つ朝鮮語の場合、そのテキストがどのような呼称をどのような理由で選び取っているのかも検討の対象のひとつとなる。

朝鮮語の呼称に関しては、1945 年以前の呼称の変遷、NHK の朝鮮語講座開始の際の名称をめぐる議論、東京外国語大学朝鮮語学科の学科名や東京大学での名称への韓国からの介入や配慮要請といった問題が想起される[4]。また、神田外語大学の設置申請に際し、文部省が「特に必要と認める」ための切り札の１枚として、設置準備室が韓国語という呼称を利用したという[5]。

朝鮮語の呼称に関する問題については、植田(2002)、それに対する反論とその延長線上の論考である内山(2004,2012,2022)によって実証的にはほぼすべての論点について議論しつくされたと思われる[6]。

ここではまず、植田(2002)・内山(2004,2012,2022)を基に、朝鮮語の呼称問題を論じる際に生じている問題点を本稿の執筆者なりに整理して挙げる。

(1)韓国語と朝鮮語は別言語とする誤解：朝鮮は総称である。しかし、南北朝鮮で用いられている言語は同じ１つの言語ではなく、「韓国の言語」＝「韓国語」、「北朝鮮の言語」＝「朝鮮

---

[1] 本稿は科学研究費・基盤研究(B)「異文化理解における外国語教科書の役割－中国語・ロシア語・朝鮮語を対象として－」(課題番号:19H01282、研究代表者:王周明大阪大学准教授)による成果のひとつである。

[2] 植田(2021)ではテキストの地図を基にこの問題を考えた。また、植田(2007b)では NHK の朝鮮語教育番組を例に非政治性の政治性について考えた。

[3] 本段落については植田(2021:63)参照。

[4] 植田(2007a:100)では、1945 年以前の朝鮮語学習書 138 冊の書名を 3 期に分けて検討し、韓・韓語、朝鮮・朝鮮語、鮮・鮮語、その他に 4 分類して呼称の使用状況の変遷を明らかにした(執筆者:山田寛人)。NHK については、植田(2002:1)・内山(2012:15-18)、東京外大については菅野裕臣「東京外大朝鮮語学科とわたくし」百孫朝鮮語学談義ウェブサイト　http://www.han-lab.gr.jp/~kanno/misc/togaifr.html　(2022 年 5 月 1 日最終接続)、東大については内山(2004:104)参照。

[5] 「第 12 回 山本和男神田外語大学元学監　大学設置という重い扉を開け放つ」神田外語グループウェブサイト　インタビュー「いしずゑを築く～神田外語とともに歩んできた人々の証言～」
https://www.kandagaigo.ac.jp/memorial/interview/12/interview_12_1.html　(2022 年 4 月 26 日最終接続)

[6] しかし、この問題については、先行研究を踏まえないまま、主観的な見解や主義・主張、ソウル標準語と平壌文化語の断片的な対照によって導き出された見解の表明がなされるという現象が見られる(金泰虎『韓国語教育の理論と実際』白帝社、2006 年、3-34 頁など)。

語」であるかのような誤解が広まっている。[7]

(2)自称と他称の混同:自称と他称を区別していない。韓国の朝鮮語話者が日本語による「他称」に「韓国語［かんこくご］」を要求することは他の言語を尊重しない行為である。

(3)何語による呼称なのかの不認識:議論するものが「何語による名称」なのかを認識せずに議論あるいは主張がなされる。(2)・(4)とも関連する。

(4)「漢字の惑わし」・「偽りの友」:同漢字異義語を漢字音の読み替えで指し示すものが等価であるかのように錯覚・誤解(曲解)する。(2)・(3)とも関連する。

本稿では、この問題点を参照しつつ、2000年以降に日本で刊行された朝鮮語テキストを対象に、そこに現れた朝鮮語の呼称を手掛かりに、歴史と変化のはざまという視点からテキストに現れた言語観・言語文化圏観をめぐり簡単な検討を試みる。検討対象として、2000～2022年までに刊行された主として大学の共通教育等の初修外国語科目の授業で用いられることを想定したと思われる60冊のテキストを取り上げる[8]。

## 2. テキスト[9]に現れた言語呼称

1945年以降については[10]、李氏朝鮮最後の皇太子・李垠と学習院大学教授R.H.Blythによる『英和対照朝鮮語入門　A FIRST BOOK OF KOREAN』(THE HOKUSEIDO PRESS, 1951)[11]が日本で最初に発行された朝鮮語教科書であると見られる(植田2007a:84)。しかし、本書は韓国駐屯国連軍のための入門書として英語で書かれたものであり[12]、「大手出版社から刊行された」日本語による学習書は『基礎朝鮮語』(宋枝学、大学書林、1957)が最初である[13]。これに続くものも、『わ

---

[7] 朝鮮語教育に関わる学会としては、朝鮮語教育学会(1999年、朝鮮語教育研究会として設立、2014年改称)があるが、2009年には「日本で初めて名称に『韓国語』が入る学会」であることを強調する団体が現れてもいる。日本韓国語教育学会ウェブサイトのトップ　http://jakle.main.jp/　(2022年4月26日最終接続)。

[8] 植田(2020,2021)で取り上げたものを基に増補した。基本的には、植田(2020:43)と同様に判型などの形態や説明の詳しさの程度といった内容から見て、教員の導きの下に教室での授業に用いられることを意図して刊行されたと考えられるものをテキストと呼ぶことにする。本稿末に「検討対象としたテキスト」として一覧を示す。なお、[16]は中等教育用のものだが、テキストという枠組みに鑑み含めた。また、放送大学の印刷教材5冊も含めたが、内容がほぼ同一のリメイク本も含まれる(植田2020:53)。本来、執筆者の経歴や専門などとの関連からの考察も必要であるが、執筆者のプロフィールなどが全く明示されておらず、どのような背景を持つ人物なのか全く不明なテキストすら少なくない(植田2020:43)。

[9] 本論文のテキストの定義に当てはまるものは広く発行されていなかったと考えられる時期等については、必要に応じ、広義のテキストとして学習書を含めて挙げた場合がある。

[10] 本稿の執筆者の調査による基礎データを参考にしつつ確認した。基礎データは、以下のような手順で作成している(調査期間:2021年10月19日～2022年3月29日)。原則として2007年までは藤井(2008)のデータを参考にする。一部重複するが、原則として2006年以降は主要出版社(朝日出版社、白帝社、白水社、同学社、NHK出版、三修社、スリ―エーネットワーク、HANA、駿河台出版社、三修社、大修館書店、ナツメ社)のウェブサイトのデータに加え、主要書店・図書館等(紀伊国屋、ジュンク堂・丸善、大学生協のオンライン書籍注文サイト、NDL ONLINE、CiNii Books)のウェブサイトのデータからキーワード検索(朝鮮語、韓国語、ハングル、コリアン、コリア語、韓語、日韓、韓日)により検索して補充し作成したデータを参考にする。本論文の以下の記述においても、この基礎データを参考にした箇所がある。なお、データ作成には川端映美氏の協力を得たが、誤りなどの責は植田にある。この基礎データは整理後に改めて公開する予定である。

[11] 1950とするものもある。日本語書名は箱にのみ示されている。

[12] 李方子(1987:182)。「この本は、米軍のPXでかなり売れたようだ。」ともある。なお、同書でBlythを「ブルライド」としているのは、朝鮮語表記の影響である。

[13] これに先立つものとして、『朝鮮語入門』(梶井陟、日朝協会、1952)、『新らしい朝鮮語の学習』(宋枝学・梶井陟、学友書房、1954)が、直後に出たものとして『朝鮮語の初歩』(卓熹銖、学友書房、1957)があるが、

かる朝鮮語　基礎・実力編』(梶井陟、三省堂、1971)のように書名の呼称は朝鮮語(や朝鮮)を用いていた。管見の限りでは、韓国語を用いたものは、『標準韓国語　Ⅰ　基礎・会話篇』(朴成媛、高麗書林、1972)が最初と思われる[14]。

その後、朝鮮半島の両国と日本との関係の変化や、社会的・経済的・文化的変化によって、朝鮮語学習の裾野が拡大し、本稿の定義するテキストが一般的な出版物として書店で広く販売されたり、書名を含め、呼称に韓国語を採るテキストが増加するに至る。現在の状況について、内山(2022:208)は「専門書などを除き,「朝鮮語」をタイトルに用いる一般の教科書は改訂版などを除けば拙著(2008)[15]がいまのところ最後のようである．圧倒的に多いのは「韓国語」で，他に「韓国朝鮮語」「コリア語」「ハングル」などの呼称が用いられている.」と指摘している。本稿の執筆者の調査によれば、一般的な出版物として2000年以降に発行されたテキスト[16]のうち、書名に朝鮮語を用いて新たに刊行されたもの(新版・改訂版などは除く)は、『至福の朝鮮語』(朝日出版社)・『聴いて覚える初級朝鮮語』・『書いて覚える中級朝鮮語』・『しくみで学ぶ初級朝鮮語』・『しくみで学ぶ中級朝鮮語』[17](以上、白水社)の5冊にとどまる。

### 3. テキストにおける呼称の選択状況

ここでは、対象とする60冊のテキストについて、まず書名を基準に分類し、副題、「はじめに類」[18]をクロスさせて分類・集計した結果を示す(表1)。

| 書名 | 副題 | はじめに類 | 冊数 | | テキスト番号 |
|---|---|---|---|---|---|
| 韓国語 | | 韓国語 | 26 | 37 | [2], [5], [8], [11], [17], [20], [22], [23], [27], [28], [29], [30], [35], [37], [38], [39], [43], [44], [46], [48], [50] [51], [52], [53], [56], [58] |
| | — | 韓国語 | 5 | | [31], [47], [49], [60], [55] |

一般的な出版物とはいえない(植田2007a：84-85)。

[14] これに続き、『標準韓国語会話　入門・実用編[ママ]』(金淑子、高麗書林、1973)、『標準韓国語 II　文法・対訳編』(李相億・早川嘉春、高麗書林、1974)のシリーズが刊行される。なお、『ハングゥルの発音　基礎韓国語講座1』(金海成、1965、韓国語普及所)が確認されるが、一般的な出版物とはいえない。また、公刊されたものではないが、韓語と呼ぶものとして、相場清らによって1952年頃に編まれた『韓語講義』のシリーズ4冊が現存しており、警察での朝鮮語教育に用いられたものと推測される(植田2009:8-16)。なお、黒田(2022:216)は、1960年代後半～1970年代初の朝鮮語の呼称をめぐる状況について、「ちなみに当時はみんな「朝鮮語」といっていた。学者、研究者、専門家ほどそうだった。日本で一般的に「韓国語」といわれるようになるのは1980年代以降である。／筆者は1978年に語学留学するが、当時でも「私は韓国で学んだので韓国語といいます」と注釈をつけていたほどだ。」と述べている。

[15] [14]『しくみで学ぶ初級朝鮮語』を指す。

[16] ここでは広義のテキストとして学習書を含め、「中級」なども挙げる。

[17] 内山(2022:208)が「拙著(2008)」としたものの続編。

[18] 以下、標題に関わらず、「はじめに」・「まえがき」等としてテキスト冒頭に配置された記述を「はじめに類」と総称する。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 한국어 | 韓国語 | 3 | | [13], [15], [40] |
| | Corean | 韓国語 | 1 | | [12] |
| | — | — | 1 | | [34] |
| | | — | 1 | | [24] |
| — | 韓国朝鮮語 | 韓国朝鮮語 | 5 | 9 | [1], [18], [25], [45] ,[54] |
| | 韓国語 | 韓国語 | 3 | | [21], [36], [57] |
| | 韓国朝鮮語 | — | 1 | | [26] |
| ハングル | 韓国語 | 韓国語 | 1 | 6 | [42] |
| | 韓国朝鮮語 | 韓国朝鮮語 | 1 | | [16] |
| | | 韓国・朝鮮語 | 1 | | [4] |
| | | 韓国語 | 1 | | [6] |
| | — | 韓国語 | 1 | | [10] |
| | | 朝鮮語、朝鮮語＝韓国語 | 1 | | [41] |
| 朝鮮語 | | 朝鮮語 | 3 | 3 | [3], [14], [59] |
| コリア語 | | コリア語 | 2 | 2 | [32], [33] |
| コリアン | 韓国語 | 韓国語 | 1 | 1 | [7] |
| Korean | 韓国語 | 韓国語 | 1 | 1 | [19] |
| HANGUL | | 韓国語 | 1 | 1 | [9] |
| 計 | | | 60 | 60 | |

**表 1　書名・副題・はじめに類での呼称**[19]

表 1 のように、書名では韓国語が 37 冊(61%)を占め、朝鮮語は 3 冊(5%)にとどまる[20]。書名に言語名が含まれないものが 9 冊(15%)あるが、これらはすべて副題に言語名を示している。その他、、ハングル、コリア語、コリアン、Korean、HANGUL が見られる。

副題にのみ見られる呼称として、韓国朝鮮語のほか、日本語以外の한국어、Corean[21]が各 1 例ある。同様に、はじめに類でも、韓国朝鮮語のほか、韓国・朝鮮語、朝鮮語＝韓国語[22]という呼称も見られる。また、1 冊の中でも異なる呼称が用いられている場合もある[23]。

---

[19] —：書名／副題に言語名が含まれない、斜線：副題がない

[20] たとえば、朝鮮語は 3 冊の内 2 冊は同一著者によるものであるが、それぞれ 1 冊として見なすなど、同一系統のシリーズや姉妹編もあるため、ここでは大まかな傾向として示す。

[21] Korean ではなく、Corean が用いられている点については、別の検討課題となることのみ指摘しておく。

[22] 藤井(2001)等が用いている「朝鮮語＝韓国語」であるか、2 つの呼称を単に＝で結んだものなのかは判断できない。なお、[17]も韓国語＝朝鮮語を用いているが、本編冒頭の「韓国語はどんなことば？」での使用であるため表 1 に挙げていない。

[23] [32]では書名やはじめに類ではコリア語を用いているが、本編では訳語に韓国語を用い(23・36・38・86・91 頁)、索引でコリア語や朝鮮語は見出し語になく韓国(語)のみある。なお、姉妹編の[33]では、コリア語がさらに問題の指示文などでも用いられている。[41]では書名や副題では言語名は用いていないが、本編では朝

## 4. テキストにおける呼称についての説明[24]

前章で見たように、書名では韓国語を用いているものが61%を占めるが、副題やはじめに類を含むテキスト全体を見れば他の様々な呼称も用いられていることがわかる。

本章と次章では、朝鮮語の呼称について、(1)各テキストがどのように説明しているか／していないか、また、(2)そのテキストがその呼称を用いる理由をどのように説明しているか／説明していないかの2点を見る。そして、それぞれの説明について、1章で整理した朝鮮語の呼称問題を論じる際に生じている問題点を参照しつつ、そこに現れた具体的な記述を基に検討する。

まず、朝鮮語の呼称についての説明とその呼称を用いる理由の明示状況をみる。60 冊中 38 冊(63%)は呼称についての説明がとくになされておらず、書名や副題、あるいは、はしがき類を含む本編における呼称が所与のものとして用いられている。残りの 22 冊(37%)には分量や内容の粗密には違いはあるものの[25]、本編で項目を立てたり、コラムを設けたりして、呼称について何らかの説明がなされている。説明のある22冊の内、8冊ではそのテキストがその呼称を用いる理由も説明されている[26]。

1章で整理した4つの問題点に沿って、呼称についての説明の具体例を見る。

### (1)韓国語と朝鮮語は別言語とする誤解

[44] 朝鮮半島で使われている言語の名称は、「韓国語」「朝鮮語」「コリア語」など、様々な名称で呼ばれています。このテキストで扱っている言葉は主にソウルを中心とした韓国(大韓民国)で使われている言葉ですので、「韓国語」と呼ぶことにします。

[47] 北朝鮮の言葉と韓国の言葉には表記法や単語、アクセントなどに若干の際が認められるだけで、大きな違いはありません。本書では韓国の正書法と発音を中心に構成しているため「韓国語」の呼称を用いています。

いずれも1文目で南北朝鮮の言語の同質性について述べているにも拘らず、2文目で使用国家や規範と結び付けることによって、韓国の言語＝韓国語という誤解を与え得る。また、(2)で示す[48]での「同じ言語でありながら使う国や地域で呼び方が違うだけです。」といった説明も同様の誤解に結び付き得る。他方、[41]では「本書で主に学んでいくのは、実際の接触機会が最も多いであろう、韓国における標準語(ソウル方言)である。」と目標言語を規定しつつ、「我々が学んでいる朝鮮語(＝朝鮮民族の言語)」という表現によって「韓国における標準語(ソウル方言)」も朝鮮語と呼び得ることを示している。[14]のように「**「＜韓国語＞は韓国のことばで，それと区別して北朝鮮のことばを＜朝鮮語＞という」**のではありません.」(以下、強調は原文ママ)と明確に述べてはいないまでも、[44]，[47]を含め、南北朝鮮の言語の同質性については触

---

鮮語を用いている。

[24] 本稿が検討の対象とした時期以前で、朝鮮語の呼称についての説明とその呼称を用いる理由を明示したテキストに『グローバル朝鮮語』(塚本秀樹 他、くろしお出版、1996年)がある。同書では冒頭の2頁を費やし「これから学ぶ言葉をこの本ではなぜ「朝鮮語」と呼ぶのか」と題して詳細な説明を付している。なお、この部分は本論文の執筆者が担当し、これを骨子にして論文化したものが植田(2002)である。

[25] [37]のように「「韓国語」とは主に朝鮮半島で話されている言語のことです。」程度の記述もある。

[26] 理由の説明があるもの:[2],[14],[16],[36],[41],[44],[47],[59]、ないもの：[12],[17],[19],[20],[22],[30],[32],[33],[34],[37],[38],[39],[48],[56]

れられているものは少なくないが([12],[16],[17],[19],[30],[47])、上で見たように誤解を招き得る記述が併記されている場合がある。

**(2)自称と他称の混同**

[48]韓国語は大韓民国(韓国)の言葉です。韓国以外に朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)と中国の朝鮮族自治区でも使われていますが、この時は朝鮮語と言います。日本では、韓国語とも朝鮮語とも呼ばれていますが、同じ言語でありながら使う国や地域で呼び方が違うだけです。

ここでは、1・2文目では自称、3文目では他称を述べていると思われるが、両者を区別せず捉えて混乱した記述がなされている。次に示すように、[47]では「韓国語なのか朝鮮語なのかという問題は大変デリケートな問題をはらんでいるため、このようにいろいろな呼称が生まれてきたのです。」と述べている。また、内山(2022:221)は「極論すれば,(中略)「自称」と「他称」が完全に一致することはありえない.」と指摘している。その上で、生じ得る「大変デリケートな問題」はむしろ「ことば(人付き合い)のマナー」(植田 2002:13)に関わる事柄である。言語の呼称ではないが、かつて韓国人は日本語で「北韓(ほっかん)」という呼称を多くの場合用いていたが、現在では通常「北朝鮮(きたちょうせん)」と呼ぶように変化している現象も参考になろう[27]。

**(3)何語による呼称なのかの不認識**

[22]しかし、「韓国」ではこの半島を「韓半島」と呼び、半島全域を「大韓民国」と考えており、「北朝鮮」では半島を「朝鮮半島」と呼び、全域を「朝鮮民主主義人民共和国」と捉えています。従って、半島全域で用いられている言語をそれぞれに「韓国語」「朝鮮語」と呼んでいます。

[47]こうした政治的背景により、現在北朝鮮では韓国という呼称は使われておらず。韓国のことを南朝鮮と呼んでいるほどですが、同様に韓国側でも朝鮮という名称はごく少数の例を除いて極力用いないようにされています。つまり、韓国語なのか朝鮮語なのかという問題は大変デリケートな問題をはらんでいるため、このようにいろいろな呼称が生まれてきたのです。

(2)・(4)とも関わるが、[22]・[47]や前掲[48]では、その呼称が何語であるのかあるのかが認識されていないように読める。朝鮮語話者が朝鮮語で「韓国語」・「朝鮮語」といった呼称で朝鮮語を呼んでいるわけではなく、仮に「한국어」・「조선어」と呼んでいたとしても、[14]が「**日本語での名称は日本語の言語習慣に従うべき**だと考えたにすぎません.」と指摘するように、朝鮮語での呼称と日本語での呼称とは別個の問題である。

**(4)「漢字の惑わし」・「偽りの友」**

(3)の2例では、「한국어」・「조선어」と、漢字を媒介として漢字音を置き換えた「韓国語」・「朝鮮語」がそれぞれ等価であるととらえているとみられる。しかし、漢字の惑わし・偽りの友という概念によらずとも、日本語の工夫・愛人と朝鮮語の공부・애인が同一漢字の語であるにも拘らず意味が異なることからも等価でないことは容易に理解し得る。しかし実際には、[22]では、直後に「このように、同じ対象が異なった名称で呼ばれたり、異った受け取り方を

[27] これには、北韓は(理念は別として実感としては)他者の領域に属し、韓国語は自己の領域に属するものという違いが関係している可能性はある。

されることがあるため注意が必要です。」と続けているにも拘らず、漢字の惑わしに囚われてしまっている。他方、[2],[17],[20],[34],[56]では「ハングゴ한국어」・「韓国語(ハングゴ)」・「チョソノ(조선어)」というようにルビや併記のような方法を用いてそれが朝鮮語であることを示そうとしている。

### 5. そのテキストがその呼称を用いる理由の説明

本章では、以下に示す4つの視点により、あるテキストがその呼称を用いる理由をどのように説明しているのかを見る。前述の通り、理由を説明しているテキストは8冊である。

#### (1)使用国家・地域、規範の視点

[2]本書ではソウル地域で話されている言葉を中心に扱っていることから、韓国語という名称を用いる。

[2]や前掲[44]・[47]の「このテキストで扱っている言葉は主にソウルを中心とした韓国(大韓民国)で使われている言葉ですので、「韓国語」と呼ぶことにします。」、「本書では韓国の正書法と発音を中心に構成しているため「韓国語」の呼称を用いています。」という記述は、扱っている言語の使用国家・地域、規範という視点を「韓国語」と呼ぶ理由としている[28]。他方、4章で見た[41]のように、ソウル標準語に朝鮮語という呼称を用いているものもある。

#### (2)国家と言語を切り離した視点

[41]本書では言語名として、「朝鮮語」を用いているが、これは「主に朝鮮半島において使用される言語」、あるいは「主に朝鮮民族が使用する言語」という意味であり、特定の国家などを前提にしたものではない。

[59]本書では，韓国と北朝鮮が位置する朝鮮半島で共通に用いられる言語，という意味から「朝鮮語」の名称を用いています．これは「韓国語」その他の名称を否定するものではありません．

本章(1)と異なり、国家と言語を切り離して、朝鮮半島という視点から言語を見ることを理由としている。

#### (3)日本語の言語習慣

[59] ただし朝鮮半島，朝鮮民族，南北朝鮮，朝鮮統一などからもわかるように，**「朝鮮」は日本語では韓国と北朝鮮を包括する名称**で，決して半島北部のみを指すものではありません(朝鮮民主主義人民共和国を「北朝鮮」と呼ぶのは半島全体が「朝鮮」であるという前提にもとづくものです)．**日本語での名称は日本語の言語習慣に合わせるべき**だと考えるのです．[29]

---

[28] なお、理由が明示されていない[34]は「この本では「韓国語」と呼ぶことにします。」、[39]は「立場や信条の違いから異なった名称を持っている言語ですが、本書においては「韓国語」とします。」というように、用いる呼称の表明のみで、その理由は説明していない。それぞれ、直後に「韓国語にさまざまな方言がありますが、ここでは韓国の標準語である、ソウル方言を学びます。」、「そして、大韓民国の「標準語」に基づいた発音、表記に従っています。」と付記していることから、韓国の標準語を扱うことがこの呼称の選択の理由と考えていることが示唆されてはいる。

[29] [14]の記述を増訂したもので、両者の骨子は同じである。

[36] 日本では韓国語、朝鮮語、コリア語、ハングルという表現も使われており、この中で、朝鮮語という表現がニュートラルな名称(朝鮮半島の言葉)という認識があり、幅広く使われていた。しかし現在は、北朝鮮のみの言葉という誤解を招く恐れがあるため、最近は韓国語という表現が一般的に用いられており、本書においても「韓国語」と記すことにする。

[59]は本章(2)で見た[59]に続く部分である。ここでは如上の視点が、「日本語の言語習慣」であるとしている。他方、[36]では、別の視点から「現在」では朝鮮語という呼称は「北朝鮮のみのことばと誤解される恐れがある」と述べている。このように、「日本語の言語習慣」が異なる確度から捉えられている場合がある。

**(4)ことばそのものを学んでほしい**

[16]この教科書では、このような立場や呼び方の違いを超えて、高校生のみなさんにことばそのものを学んでほしいとのおもいから、少し長いですけれど「韓国朝鮮語」と呼ぶことにしました。また、隣国の全域を示す語として「韓国朝鮮語」という呼び名を使います。

[16]では、「ことばそのものの学んでほしいとの思い」が挙げられている。しかし、それが「韓国朝鮮語」という呼称に如何につながるのかは不明瞭である。

以上のように、理由が説明されているが、(1)の旧来の国民国家・民族国家に基づく言語観によるものもあれば、(2)・(3)の呼称に関する議論の歴史を踏まえたものある。(4)は意味が不明瞭ではあるが、中等教育における朝鮮語教育の歴史に由来するものともいえるかもしれない。

## 6. おわりに

1 章で挙げた様々な出来事や議論を含め、日本での日本語による朝鮮語の呼称にまつわる問題には歴史がある。一方、歴史の流れの中で、呼称を取り巻く状況に変化が起こりもしている。

歴史という視点から見れば、4 章で示した呼称の説明以外に、次のような「学術的」・「学問的」な名称といった説明も見られる。

[12]これから学ぶこの言語を指すのに，学術的な名称としては日本では「朝鮮語」が広く用いられている.

[20]●日本で：朝鮮語，韓国語，コリア語，ハングル語など，様々に呼ばれているが、学問的な名称としては，“朝鮮語”が使われている。[30]

また、前掲[36]のように、「現在」と対比させて、「ニュートラルな名称」という認識から過去には朝鮮語が幅広く使われていたという説明もある。

状況の変化という視点については以下のような点が挙げられる。

1.「80 年代以降、日本で教授される朝鮮語は韓国のソウル標準語へとシフトし」ており(伊藤 2016:100)[31]、一般的な出版物としてのテキストでの目標言語は基本的にはほぼすべてソウル標準語であるといって差し支えないだろう[32]。

---

[30] [32]・[33]にも「学問的」という説明が見られる。

[31] 伊藤(2012)「朝鮮語発音教育の問題点」『中国語教育』10 での言及の繰り返しである旨、示されている。

[32] とはいえ、それ以前の目標言語が、平壌文化語(朝鮮文化語)であったという訳でもない。また、[39]では

2. 「「かんこくご〔韓国語〕」という名称の普及も，韓国の圧力以外に，国家名＝言語名という認識が作用している可能性もあろう.」という内山(2022:229)が指摘する要因は大きいのではないかと思われる[33]。

3. 朝鮮語学習者の広がりによって、目の前の実用的なことばへの関心・ニーズの重点の高まりと反比例して歴史的背景への関心が低下しているだろう。

4. 朝鮮語の教え手の広がりによって、呼称をめぐる歴史とは切り離された、あるいはそれらにはあまり関心のない世代に担われる部分が拡大したこともあるだろう[34]。

5. 朝鮮語テキストというものが商業出版物として成り立つものになったという点がある[35]。

このような変化の中で、学習者や教え手に韓国語という呼称を所与のものとする人々が増加したことや、歴史を踏まえた学術的・学問的・ニュートラルといった理由は十分な説得力を持ちがたくなっていることが予想される。

他方、国際性涵養・グローバル理解・多文化共生といった外国語教育／学習で目的とされがちな掛け声と合わせ見る時、内山(2004:95-96)の「名称の選択は自由であ」り、「要は各人が他人を納得させられる理由を持って名称を選択することであ」り、「良心によって各自が選択した名称に圧力をかけるようなことはあってはなら」ず、「「日本人による日本語での呼称」を主体的に選択することが求められている」という主張は重要であろう。

なお、本稿の対象の時期のものではないが、次のような旧来の国民国家・民族国家に基づく言語観(「国語」観)を反映した見解がある(鄭明石・鄭喜盛 1982:はしがき)。そこでは、「いま、日本人が漠然と抱いているいわゆる「朝鮮語」の言語観の中で一番危険な誤解は、《朝鮮語は、朝鮮人が朝鮮半島で用いていることばの集合である》という考えだと思います。」と述べ、「一国の国語はその国民によることばで、その国民によってきちんと区分され、分類体系化された言語なのです。」と主張されている。そして、韓国人の「朝鮮語」認識には、「日帝時代[ママ]においてすでに消滅した歴史上の朝鮮語」、「現在北韓(北朝鮮)における地政学上の朝鮮語」の 2 つがあり、「国語としての元は同一であるが、(中略)現在韓国で使われているそれとはかなりの相違点がみられ」るという言語観が述べられている。もちろん、現代の感覚で安易に批判することは控えねばならないであろう。だが、根本的には同様な言語観は現代のテキストにも見られるのではないだろうか。

---

「日本においてこの言語は「韓国語」「朝鮮語」「韓国朝鮮語」などと呼ばれていますが、語学授業においては現代韓国語で話されている言語のことを指します。また高校や大学で開講されている科目名も「韓国語」「朝鮮語」「コリア語」などとさまざまです。」という独自の見解も見られる。

[33] 背景や性質には異なる点はあるが、ミャンマー語・ジョージア語といった呼称の発生も参考にできよう。また、この認識の根強さは前掲[14]の「**「＜韓国語＞は韓国のことばで，それと区別して北朝鮮のことばを＜朝鮮語＞という」のではありません.**」の「.」が、改訂版[59]では「！！」に改められていることも示唆しているかもしれない。

[34] ここには、言語を専門としない母語話者の教え手の存在も関係するだろう。

[35] 商業出版物の性格については、植田(2014,2021:72)参照。たとえば、『表現が広がるこれからの韓国語　会話＋文法』(権在淑、三修社、2007 年)の標題紙裏には、「本書は『表現が広がるこれからの朝鮮語』を改題し、新たに CD を附加したものです。日本では学術的には「朝鮮語」を用いるのが主流ですので、本書中では「朝鮮語」を用いています。」とあり、旧版の内容を踏襲している。このような改題もその一例といえよう。

高等教育を念頭に、「外国語をなぜ教える／学ぶのか」(植田 2007b:29)という問題意識の下に見れば、[14]の「本書では,（中略）「朝鮮語」の名称を用いています．これは,「韓国語」その他の名称を否定するものではありません.」、[16]の「でも、みなさんは、みなさんにとって馴染みやすい名称で呼んでくだされば結構です。」という記述は呼称についての本質を示すものであるといえよう。

本稿で見た朝鮮語テキストにおける呼称の説明やその理由の説明は、呼称をめぐる歴史と変化のはざまに見えるひとつの風景を示している。

### 検討対象としたテキスト[36]

[1]生越直樹 他(2000)『ことばの架け橋〈韓国朝鮮語初級テキスト〉』白帝社　2010年第11刷
[2]油谷幸利 他(2001)『総合韓国語1』白帝社
[3]河村光雅 他(2002)『聴いて覚える初級朝鮮語』白水社　2007年第7刷
[4]邊恩田(2002)『ハングル初級』白水社　2005年第3刷
[5]生越直樹 他(2002)『韓国語Ⅰ('02)』放送大学教育振興会
[6]梁貞模 他(2004)『やさしいハングル』新幹社
[7]金賢信 他(2004)『Kim&Kimのハッピー・コリアン〈韓国語初級テキスト〉』白帝社
[8]渡辺鈴子(2004)『日本語と照らして学ぶ韓国語基礎』白帝社
[9]韓晶恵 他(2005)『SMART HANGUL BASIC(スマート ハングル ベーシック)』白帝社
[10]梁貞模 他(2005)『初級ハングル〈コミュニケーションのために〉』新幹社　2007年第2刷
[11]生越直樹 他(2006)『韓国語入門Ⅰ('06)』放送大学教育振興会
[12]野間秀樹 他(2007)『はばたけ！韓国語〈Campus Corean〉』朝日出版社　2017年第2版第10刷
[13]曺美庚 他(2007)『キャンパス韓国語〈캠퍼스 한국어〉』白帝社
[14]内山政春(2008)『しくみで学ぶ初級朝鮮語』白水社
[15]松尾勇 他(2009)『初めての韓国語〈한국어 첫걸음〉』同学社　2011年再版
[16]高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク西ブロック「新・好きやねんハングル Ⅰ」編集チーム(2009)『新・好きやねんハングルⅠ〈高校生のための韓国朝鮮語〉』白帝社　2019年8刷
[17]野間秀樹 他(2010)『きらきら韓国語』同学社
[18]生越直樹 他(2011)『ことばの架け橋　改訂版〈韓国朝鮮語初級テキスト〉』白帝社　2015年改訂第5刷
[19]金香男 他(2011)『らくらくKorean〈韓国語初級テキスト〉』白帝社
[20]浜之上幸(2012)『韓国語入門Ⅰ('12)』放送大学教育振興会

[36] 植田(2021)で対象としたテキストに[19],[25],[33],[46],[52]-[60]の13冊を追加した。配列は発行年月日順で改訂版等とあるものは改訂時の、重版・重刷は初版の年月日を採った。同一年月日発行の場合は筆頭執筆者名の50音順(朝鮮名は日本漢字音)によった。初版第1刷でない場合には、出版社名の後に発行年と版次もしくは刷次を示した。書名は奥付に従い、副題と見なした部分に〈　〉を付す。ただし、CD付などの書名に関わらない部分は略した。また、表紙にのみある朝鮮語の書名等は示していない。

[21]松尾勇 他(2013)『じゃんけんぽん〈入門初級韓国語教材〉』同学社
[22]長谷川由紀子(2013)『コミュニケーション韓国語　読んで書こうⅠ[改訂版]』白帝社　2020年6刷
[23]金順玉 他(2014)『最新チャレンジ！韓国語』白水社　2014第2刷
[24]油谷幸利(2014)『実用韓国語　改訂版』白水社　2017年第4刷
[25]生越直樹 他(2015)『根と幹(こんとかん)〈韓国朝鮮語初級テキスト〉』朝日出版社
[26]熊谷明泰(2015)『アリラン　改訂版〈初級韓国朝鮮語教材〉』朝日出版社
[27]朴美子 他(2015)『グループで楽しく学ぼう！韓国語』朝日出版社　2018年第4刷
[28]松岡雄太 他(2015)『完全！韓国語初級Ⅰ』同学社
[29]飯田秀敏 他(2016)『韓国語の基礎Ⅰ』朝日出版社
[30]浜之上幸(2016)『韓国語Ⅰ（'16）』放送大学教育振興会　2018年第2刷
[31]李熙卿 他(2016)『マルプンソンで学ぶ韓国語初級〈テーマを中心とした4技能総合教材〉』白帝社
[32]金情浩 他(2017)『ふじのちゃんのコリア語入門　会話編』朝日出版社
[33]中西恭子(2017)『ふじのちゃんのコリア語入門　文法編』朝日出版社　2021年第3刷
[34]李潤玉 他(2017)『三訂版・韓国語の世界へ　入門編〈コツコツ学び、カジュアルに話そう〉』朝日出版社　2019年第4刷
[35]鄭世桓 他(2019)『パルン韓国語　初級』朝日出版社
[36]李忠均 他(2019)『ミソリ〈「美しい音」で学ぶ初級韓国語〉』朝日出版社
[37]林河運 他(2019)『するする韓国語』朝日出版社
[38]厳基珠 他(2019)『韓国語の初歩　三訂版』白水社
[39]韓必南 他(2020)『マル韓国語』朝日出版社
[40]崔在佑(2020)『やってみよう！韓国語〈해보자! 한국어〉』朝日出版社
[41]高木丈也 他(2020)『ハングル　ハングルⅠ〈한글 한 그루 Ⅰ〉』朝日出版社
[42]松﨑真日 他(2020)『ハングルマダン　改訂版〈韓国語教本〉』朝日出版社
[43]河村光雅(2020)『韓国語ポイント50　改訂版』白水社
[44]永原歩 他(2020)『韓国語Ⅰ('20)』放送大学教育振興会
[45]生越直樹 他(2020)『ことばの架け橋　精選版〈韓国朝鮮語初級テキスト〉』白帝社　2000年初版　2020年精選第1刷
[46]金昌九(2020)『新装版　テーマで学ぶ韓国語(入門～初級)』駿河台出版社
[47]金京子・喜多恵美子(2021)『三訂版　パランセ韓国語　初級〈ハングル能力検定試験5級完全準拠〉』朝日出版社　2021年三訂初版
[48]金銀英 他(2021)『これでOK！韓国語　初級』朝日出版社
[49]中島仁 他(2021)『新・韓国語へのとびら〈会話と練習をふんだんに〉』朝日出版社
[50]李正子 他(2021)『ひかりとシフのどきどき韓国語』朝日出版社
[51]山崎玲美奈(2021)『12課で学ぶ韓国語の入門』白水社

[52]金昌震 他(2021)『アンビシャス韓国語　入門編』北海道大学出版会
[53]イ・ユニ 他(2022)『よく使うことばで学ぶ韓国語　改訂版』朝日出版社
[54]生越直樹 他(2022)『改訂版　根と幹(こんとかん)〈韓国朝鮮語　初級テキスト〉』朝日出版社
[55]河正一(2022)『ワンステップ韓国語〈文字からはじめて中級をめざすあなたへ〉』朝日出版社
[56]金珍娥 他(2022)『はばたけ！韓国語　ライト版1』朝日出版社
[57]山崎玲美奈(2022)『キムチ①〈韓国語入門〉』朝日出版社
[58]陸心芬 他(2022)『どんどん話そう！韓国語』朝日出版社
[59]内山政春(2022)『しくみで学ぶ初級朝鮮語　改訂版』白水社
[60]町田小雪 他(2022)『韓国語1ｓｔ Step〈大学生のための実践会話〉』白帝社

## 引用文献

伊藤英人(2016)「朝鮮語研究の国際発信」砂岡和子・室井禎之『日本発多言語国際情報発信の現状と課題』朝日出版社
植田晃次(2002)「言語呼称の社会性」『社会言語学』II、「社会言語学」刊行会
植田晃次(2007a)『日本近現代朝鮮語教育史』科学研究費補助金基盤研究(B)「日本における朝鮮語教育史の総合的・実証的研究」研究成果報告書(課題番号:17320085)
植田晃次(2007b)「「どのように」の外国語教育と「なぜ」の外国語教育」『批判的社会言語学の展開』大阪大学大学院言語文化研究科
植田晃次(2009)「日本近現代朝鮮語教育史と相場清」『言語文化研究』35、同上
植田晃次(2014)「金島苔水とその著書」李東哲・安勇花『日本語言文化研究』3(上)、延辺大学出版社
植田晃次(2020)「朝鮮語テキストの日本語表記法の記述小攷」『批判的社会言語学の探訪』大阪大学大学院言語文化研究科
植田晃次(2021)　「朝鮮語テキストの地図小攷」『批判的社会言語学の対話』同上
内山政春(2004)「言語名称「朝鮮語」および「韓国語」の言語学的考察」『異文化』5、法政大学国際文化学部
内山政春(2012)「「朝鮮」と「台湾」」『異文化』13、同上
内山政春(2022)「固有名詞の「自称」と「他称」」『異文化』23、同上
黒田勝弘(2022)『韓国語楽習法』KADOKAWA
鄭明石・鄭喜盛(1982)『現代韓国語』高麗書林
藤井幸之助(2001)「多言語社会ニッポン　朝鮮語＝韓国語④」『ことばと社会』5、三元社
藤井幸之助(2008)「朝鮮語＝韓国語教育のための文献リスト」野間秀樹 編著『韓国語教育論講座』第4巻、くろしお出版
李方子／姜容子 執筆・李保慧 訳(1987)『歳月よ王朝よ』三省堂